被災地派遣レポート＜第１２回＞

主税局品川都税事務所長　江藤　巧さん

去る５月３日から５月８日までの間、岩手県陸前高田市で被災地支援業務に従事してきました。今回の派遣は若手職員が中心とのことでしたが、体力・知力では若い職員には敵わないものの、気力で頑張ると自分を鼓舞しての参加でした。

４日、午前４時３０分、宿泊所である岩手県大船渡合同庁舎に到着しました。午前５時には合同庁舎へ移動し即座に引継ぎ、慌ただしく業務開始となりました。私たち第８陣の業務は、市役所仮庁舎及び出張所での罹災証明発行業務、市給食センターでの支援物資（主に食料）の搬入・搬出業務、支援物資提供者のデータ管理、ＪＡ倉庫での支援物資（主に生活用品）の搬入・搬出及び管理業務、広田中学校での支援物資（古着）の仕分け業務、仮設住宅での寝具各戸配付業務でした。

私は、古着仕分けと寝具配付業務に従事しました。古着仕分けは、津波被害が大きかった広田中学校で行いました。広田地区は太平洋に突き出した岬にあり、そこに向かう途中は、津波に押し流された瓦礫の山、押し潰された車や漁船、そして汚泥に埋もれた家屋の基礎部分など言葉を失ってしまう光景でした。広田中学校では、３月１２日に卒業式が予定され、古着仕分けを行った屋内運動場はステージには国旗・市旗、正面左壁には式次第が掲示され、その上にある時計は午後２時４７分で止まったままでした。そして、その内壁の床上８０ｃｍ程のところには津波に浸かった跡がくっきりと残っていました。その場景で、広田中学校へ案内してくれた市職員の方から「自分は、この中学校の卒業生なんです。自分の家も津波に飲まれてしまいました。」と伺ったときは、目頭が熱くなり、言葉に窮してしまいました。

私は、総括班長として、岩手県・陸前高田市との業務内容の確認・調整、各班への業務の割振等を行うとともに、派遣職員全員の安全・健康を気遣う毎日でした。広田中学校での作業中に大きな余震があり、皆で屋内運動場を飛出し、カーラジオで「津波の心配はありません」と確認できるまで緊張するといったこともありました。また、大船渡市の合同庁舎から陸前高田市の各業務地へ班毎にレンタカーで通うわけですが、道路は寸断され、段差があったり、瓦礫が道路にはみ出していたり、さらに、自衛隊の大型の特殊車両とすれ違うなど、運転も慎重を要するものでした。唯一の楽しみは業務を終えて班毎に行くお風呂でした。このときは、災対服を脱いでいることもあり、車で片道３０分もかかるものの、リラックスすることができました。

私達の支援業務は、班毎に派遣期間を通して固定しました。そのことにより、各班とも業務内容を十分把握することができ、日を増すごとに積極的に創意工夫を行い、効率的に業務を遂行できました。最終日には、次の陣への引継書や業務マニュアルをまとめた班もありました。私は総括班長でしたので、帰京する最終日の前夜には岩手県の担当課長から「東京都だからお願いしたい。東京都の皆さんは、資質・士気も高く、本当に助かっています。ありがとうございます。」との感謝の言葉を頂くことができました。

私は、今回の被災地派遣を通して得たものは大きく、貴重な経験をさせていただくことができました。私を送り出していただいた品川都税事務所の皆様に感謝申し上げます。

(広田中学校屋内運動場内)

（ 広田中学校周辺 ）